

インディアナ大学・パデュー大学インディアナポリス校における High Impact Practice の体系化についての調査報告

A Report on Systemization of High Impact Practices in Indiana University-Purdue University Indianapolis

伊藤 創*

Hajime ITO

抄 録

本稿では、Indiana University-Purdue University Indianapolis (IUPUI) にて行った聞き取り調査の中で、特に同校が 2008 年から導入したサービスマーケティング、スタディ・アブロード、インターンシップ等を包括する枠組みである RISE program に焦点をあて、その概要を報告する。同大学は、学生数 3 万人を超える大規模大学であり、そこでは各学部・学科、それらから独立した部局によって多くの High Impact Practice (HIP) が個別に実施されていた。しかし 2008 年以降、それらを束ね、共通の構造を持たせ、評価の尺度を学部横断的に通用するものに変える試みがなされており、その枠組みが RISE program である。この共通の枠組みに、既存あるいは新規の HIP を組み込んでいくために、部局間のコミュニケーションを促し、新しい HIP の立ち上げに一定の縛りを設け、その条件を満たしたもののみを RISE として認めることとしている。また認められたプログラムには Grant を与えることで、担当教員の動機付けも行っている。プログラムの立ち上げを教員主導にすることにより、教員が自らの担当するコースにおいて最も効果の高い HIP を自らで考案することができ、その実施にも高い動機付けを行うことが可能となっている。RISE にはこうした独自のアイデアが盛り込まれているが、その核となるのは、プログラムの立案や実施のあり方、方針が教員主導で形成され、ボトムアップで HIP の統括者に上げられる一方、各プログラムの形態に縛りを設け、各プログラムに共通の枠組みを持たせるトップダウンの側面も同時に合わせ持つという点であると思われる。

1. はじめに

本稿では、2015 年 10 月 5 日から二日間にわたって IUPUI にて行った聞き取り調査から、特に同校が 2008 年から導入したサービスマーケティング (SL)、スタディ・アブロード (SA)、インターンシップ (IS) 等を包括する枠組みである RISE program に焦点をあて、その概要を報告する。

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

同大学は、1891年に創設されたインディアナ州の中でも最も大きな総合研究大学の一つであり、250以上の学位プログラムを提供する（幅広い文科系と理科系の専攻があるが、インディアナ大学が主に文系、パデュー大学が主に理系のコースを提供する）。この学生数3万人を超える大規模な大学では、様々な学部、部局から様々な経験型学習（Experiential learning、「EL」）、SL、SA、IS等が提供されていた（例えば、ELはCenter for Research and Learningやthe Center for Teaching and Learningによって、SLはthe Center for Service and Learningによって、SAはOffice of international Affairsによって、といった具合である）が、近年、それらを統括し、共通の枠組みで学生の評価やプログラム自体の評価を行う体制を整えるための組織が編成された。その枠組みがRISE programであり、RISE program directorとして就任したのが、Dr. Jennifer Thorington Springer氏である。本稿は彼女に対して行った聞き取り調査の内容をまとめたものである。

RISE programという形で個々のプログラムの枠組みを作り上げ始めた2008年以前は、上述のような部局がそれぞれの単位で様々なプログラムを立ち上げ、実施されていた。すなわち、各プログラムを統括する「home」となるべき組織がなく、ばらばらに、かつ単発で実施されている状態であったのである。したがって、プログラムにおける学生の評価は、当該のプログラム内で完結してしまっており、それが他部局のよく似たプログラムと整合性があるのか、またプログラム自体の効果の検証も十分になされていない状態であった（なされていたとしても、各部局、あるいは担当教員による狭い範囲の検証に留まっていたという）。

こうした状態から、各プログラムを構造化し、共通の評価尺度を作成し、プログラムの効果検証をより客観的な形で行うための統括役として、Springer氏が雇われたという（また彼女は、各プログラムをもっと学生、教員、社会に「宣伝する」という役割も担う）。

2. RISEの概要とこれまでの発展

2.1 基本構造

RISE programは、以下の4つのカテゴリーに属する様々なプログラムの総称である。

「R」 Undergraduate Research Experience Courses

「I」 International Experience Courses

「S」 Service Learning Courses

「E」 Experiential Learning Courses

「R」と「E」については、前者は、リサーチ、あるいは制作活動（芸術分野）に関するプログラムであり、後者はおおよそインターンシップに相当する。「I」は、留学や短期のSAといったプログラムに相当するが、2013年度のIのプログラムへの参加者は685名であり、これはRISE全体の参加者8870名の7.7%である。

同大学の学部生は、これらのRISEプログラムのうち、少なくとも2つを学位取得過程に入れる

ことが「推奨」されている。現在のところ、RISE program の履修はあくまで“expected”であり、義務ではない。ただし、Honor College に属する学生は、二つを履修することは義務化されている。まずは、こうした学修に特に積極的な学生層に対して義務化を行い、そこから全学生に対する履修の義務化を進めていこうという目論見であるという。

学生は、RISE course page にて興味のあるプログラムを見出し、アドバイザーとともにそれらをどの学期に組み込んでいくか、学位取得の過程と合わせて一緒に考えることになる。各プログラムは以下のような形で、4つのカテゴリーの RISE プログラムが各セメスターに設定されている。

RISE Classes Summer Term 2015 (4155) This course listing information reflects an update: Wednesday, 05-Aug-2015 09:36:18 EDT	
Research International-Study Abroad Service Learning Experiential Learning	Research and International Study International-StudyAbroad and Service Learning Research and Service Learning Research and Experiential Learning

RISE Classes Fall Term 2015 (4158) This course listing information reflects an update: Friday, 28-Aug-2015 10:46:23 EDT	
Research International-Study Abroad Service Learning Experiential Learning	Research and International Study International-StudyAbroad and Service Learning Research and Service Learning Research and Experiential Learning

RISE Classes Spring Term 2015 (4152) This course listing information reflects an update: Tuesday, 17-Mar-2015 09:27:48 EDT	
Research International-Study Abroad Service Learning Experiential Learning	Research and International Study International-StudyAbroad and Service Learning Research and Service Learning Research and Experiential Learning

2.2 共通の枠組み

上記だけであれば、既存の様々な HIP プログラム（IUPUI のサイトでは、これらのプログラムはすべて High Impact practice であるという記述があるので、以降、こうしたプログラムの総称として HIP という用語を用いる）の分類、整理だけのように見えるが、ここに、各学科のコース、科

目と結びついたこうした各 HIP について、共通の構造、また共通の評価基準を持たせようという点に RISE の特徴がある。具体的には RISE プログラムに属するすべての HIP は以下四つの「RISE criteria」を満たす必要があるのである。

Qualified Experience

各プログラムは、通常の座学やオンラインでの講座等では得られない現実社会における直接的な接触経験を通じて、教室内で学んだ概念や方法論、スキルを実際に試して見る機会を得られなければならない。

Integration of knowledge

各プログラムは、PUL (Principles of Undergraduate Learning¹) のどれを伸ばすかを明確にした上で、学修のフレームワークを提供しなければならない。そして、そのフレームワークの上で、教室内で学んだ知識や理論を現実世界において応用することで、これらの統合をはかることが求められる。

Reflection

各プログラムは、授業の目的に沿った形で、構造化された授業の中に組み込まれている必要があるが、その中でも特に、活動の「振り返り (reflection)」を促し、自らの学びを批判的に考察する課題が組み込まれていなければならない。

Assessment

各授業 (コース) は、学生の学びと、また HIP の効果についての明確な評価のプランを備えていなければならない。またそれらは、PULs と関連付けられた形でなければならない。

2.3 構造化に向けた各部局におけるコミュニケーション

以前は、別個の部局がそれぞれにプログラムも立ち上げ、運営を行っていたために、完全に独立したプログラムの集合であったが、現在は、徐々にこれらの RISE criteria に沿った形で、各プログラムが修正され、構造化が進んできたという。こうした構造化のために、RISE program director に就任した Springer 氏がまず始めたのは、各部局が持つ情報を一箇所に集め、各部局間でコミュ

¹ Principles of Undergraduate Learning は以下の6つから成る。

PUL 1: Core Communication and Quantitative Skills

PUL 2: Critical Thinking

PUL 3: Integration and Application of Knowledge

PUL 4: Intellectual Depth, Breadth, and Adaptiveness

PUL 5: Understanding Society and Culture

PUL 6: Values and Ethics

ニケーションをとらせることであった。各部局のプログラムディレクターの会合を月に一度行い(同会合には、単位付与のない co-curricular のプログラムを司る staff も参加する)、全体の枠組みについて構想を練り、そこに沿った形でのプログラムの修正を図っている。また同会合には、2名以上の学生も毎回参加し、学生から見たこれらのプログラムの改善点などについての意見も取り入れられる。その中では、様々なコースが別個の部局によって運営されていることにより、コースのタグ付けが誤っていたり、重複も存在したりもしたことも明らかになり、こうした点を修正しつつ、全体としての方向性を定める体制作りを行っているということである。

2.4 新たな RISE program の立ち上げと教員の参加に関する動機付け

RISE という枠組みの構築は、これまで各部局によって独自に行われていた HIP を統合することが大きな目標であるが、もう一つ、こうした HIP をさらに活性化、充実させ、そこに従事する教員を増やすことも重要な課題である。

そのための方策として RISE program が特徴的な点は、教員が自ら、学内の科目と HIP を組み合わせ独自に RISE プログラムを作成することを可能していることである。プログラムを立案し、申請が通れば、HIP を実施でき、また RISE コースに認定されるとその HIP 実施に関する助成金 (2,500 ドル) が与えられる。

RISE プログラムとして認定されるためには、先述の RISE criteria を満たしていることが要件であり、下記のような情報を満たした申請書を提出する。

I. Applicant Information Section

II. Faculty Profile Section

III. Department/School Support Section

- ・ 当該のプログラムをサポートしてくれる学部長・学科長などからの推薦状
(教員が RISE プログラムに時間と労力を費やすことになるので、学部・学科内での仕事量が制限されるが、そのことを認める許可証に近いものと考えられる)。

IV. Proposal Section

- ・ 計画している RISE プログラムの概要 (200 - 250 words)
- ・ コースの名前、ナンバー
- ・ 学生の参加予定人数
- ・ 当該の RISE course がどの学部、学科の学生を主な対象とするか。
- ・ 具体的に学生がどのような経験をするのか。
- ・ コース内でどのような振り返りがなされるか。
- ・ 自らの専門の学びがどう統合されるか。
- ・ 当該の RIESE プログラムが学部や学科にとってどのように重要か。
- ・ いつ、開始される予定か。どの程度の頻度か。

- 当該のプログラムで、どのような学びのアウトカムが期待されるか。
(PULsに関連付けて述べること)。
- 学生の学びがどう評価されるか。
- 計画中の RISE プログラムの評価がどのようになされるか？またそれがどのような形で公表されるか。
- 当該のプログラムをどのように世間に公表するか、知名度を高めるか。

etc.

学外での学びが主である HIP を、いかに専門を跨いだ、すなわち学際的なものにし、その一方で、こうした HIP の担当者、受講者両者にとって専門外（つまり付加的）なものとしてではなく、あくまで教員の専門を生かし、学生にとっても自らの学位の取得過程にうまく合致するようなコースにするか、は大きな課題である。しかし RISE では、こうしたプログラムの立案そのものを faculty 主導にして、自らで自分たちの学生用の HIP を考案させるように仕向け、そこに助成金を与える、というシステムを導入することによって可能にしているのである。

また、この RISE プログラムの立案（そして実施）を教員主導にすることによって、一種の FD の効果も期待できるという。教員が自らの科目のみ、を考えるのではなく、学位プログラム全体の学びを意識し、また他学科の学びも意識しながら、全体の中で自らの主導する HIP を位置付けるという作業を経ることになるからである。

3. 構想と課題

3.1 Budes の役割を担うプログラムへ

RISE では e-portfolio を用いているが、e-portfolio は、学生の学びのエビデンスを蓄積する場所であり、自らの学びの振り返りを可能にし、それを元に教員が評価し、またプログラムの効果の評価にも用いることができる。しかし、Springer 氏は、RISE において e-portfolio を用いるのは、こうした従来の機能に加え、自らが「I'm a RISE scholar」という意識を持つための「Badge」と同様の役割を持たせるため、という目的が大きいという。

「Badge」とは、学位よりも小さな範囲の学力や能力を示すものである。学生は大学での学修を通じ様々な知識やスキルを得るが、それらのすべて大学の学位によって示されるわけではない。例えば、知名度の高い奨学金を手にしたたり、プログラミング言語を習得したりした場合、あるいは、ボランティア団体でリーダーを務めた経験といった自らの経験や能力、スキルを示すものとして、RISE の修了が価値を持つようになることを将来的な構想として持ちつつ、e-portfolio の使用をすべての RISE program に義務化するべく取り組んでいるところであるという。

ちなみに、IUPUI にはすでに「e-PDPs」が存在する。「PDP」とは、「Personal Development Plans」の頭文字をとったものであり、「学生が自らの学びや、パフォーマンス、そして成果の進捗を記し、今後の 1 個人的な、2 教育に関する、3 キャリアに関する計画や改善に役立つ（和栗:91）」ため

の自己記録のである。IUPUI ではまず、初年次教育の中で SL の経験をこの ePDPs 書き込むことを学ぶ。この ePDPs の中には、SA などを記録する portfolio などあつて、将来的にはこの ePDPs の中に、RISE も組み込んで、RISE に参加した学生は必ず、このポートフォリオを完成させることを義務化することを構想している。こうすることによって学生の学びの蓄積である ePDPs の中に、RISE が Budge の 1 つとして組み込まれるようになることが期待される。

3.2 より多くの RISE 履修者の確保から必修化へ

こうした RISE 修了の価値の向上には、より多くの学生が多くのプログラムを修了することが重要になってくるが、現状では学生すべてに RISE program に属する HIP を必修化するのは難しいという。というのも、現在は、コース、科目と結びついた HIP プログラムは、修了すれば単位が付与されるが、そうでない co-curricular の扱いの HIP も多数あり、RISE はあくまで前者のみのプログラムを対象としているからである。しかし将来的には、co-curricular の扱いの HIP も同じように学びを得ているなら、単位付与されるべきであり、RISE の中に組み込んでいきたいとのことである。

こうしたプログラムの整理は時間をかければ解決するものであるが、もう一つ、必修化に向けた RISE 履修者の増加のために、その柔軟性の確保にも力を入れている。特に HIP は金銭的な負担のかかるプログラムや、身体的な条件によって参加が難しいプログラムなども少なくない。こうした負担や制限を考慮し、例えば、諸般の理由により SA に行けない学生に、「Study away」、あるいは「global classroom」を利用したプログラムも用意している。前者は、IUPUI、また学生の出身地を離れて異なった地方で異文化理解、国際的な経験を積むというもので、後者は他国の大学とインターネットで授業をつなぎ、自国にいながら、海外の学生たちと交流するというものである。こうしたオプションを用意しておくことで、RISE program 参加への敷居を低くし、より多くの履修者の確保に勤めているという。

さらに、履修者の確保のためにはプログラムの数そのものを増やす必要もあるが、それには organizer となる担当教員の確保が重要になってくる。これは RISE に限らず、多くの大学に置ける HIP の実施に関わる課題であろうが、こうしたプログラムは負担が多く、さらに、HIP の実施が十分に実績として評価されていないことが大きな問題である。IUPUI においても、新たな RISE プログラムを立ち上げ、学生の学修に寄与している教員もいる（実際にそれが IR のデータでも現れている）が、例えば、それがその教員がテニユアになれるかの基準にはなっておらず、こうした活動、努力が報われないという現状であるという。そういう意味では、教育型大学であっても、研究業績が評価されるという問題はアメリカにおいてもまだ根強く残っているということである。

こうした状況にあつて、Springer 氏は現在、大学就任直後の（特にテニユアトラックにのつた）新任の教員にできるだけ早期に RISE program について周知し、そこにコミットする教員に仕立て上げることに注力をしているという。こうした新任の教員は、pedagogy を学ぶ事にとっても熱心であるから、というのがその理由である。また同時に、テニユアでない教員をもっと RISE にコミッ

トさせるには、やはり何らかのインセンティブが必要であるとも語る。Grant を与えることもその一つであるが、テニユアの教員でなければそういったこともなかなか難しいのが現状であるので、現在は、特に、HIP の立ち上げや実施を業績として発表する場を提供することにも取り組んでいるとのことである。

3.3 さらに体系化へ

RISE 修了の価値の向上、教員の確保に加え、プログラムのさらなる体系化も現在の重要な課題である。様々な学部・学科によって実施される RISE は、の各プログラムがレベル分けされているわけではない。もちろん、RISE program は、各授業（コース）に組み込まれたものであるため、各学科内においては、当該の HIP を含んだコースが、導入レベルから、中級、capstone 科目等のどこかに組み込まれている。しかし、それらはあくまで学科内での区分であり、今後、全学科の学生にとっても必修のプログラムとして機能させていくためには、学部・学科横断的に、そのレベル分けがなされていく必要がある。

その中で、Springer 氏が最も課題であると指摘するのが、それぞれの学科、専門分野で、例えば、Critical thinking といったスキルの求めるところが違うという点である。こうした学科に抛らない generic なコンピテンシーやスキルを、各学科の求める卒業までに身につけさせる能力の中にかかに組み込んでいくのは非常に難しいのである。特に米国では、各学部・学科に、複数の認証団体が付いているので、それらの認証の基準を満たす必要がある。そうすると、どうしても学部・学科間で独立したプログラムになりがちで、またそこで身につける能力や評価の基準なども互換性のない閉じたものになってしまいやすい。

各学科の授業（コース）に結びついたプログラムというのは、各教員の専門性が活かして、また教員の動機付けも高くなることは確かである。その一方で、どうしても他学部・他学科の学生からは参加が難しいものになるし、仮に generic なスキルを評価しても、それが各学部の文脈にどう位置付けられるのかを考えるのは難しくなるのである。

4. 結語

このように多くの課題は抱えるものの、RISE program は短い期間で多くの成果を上げてきた。その鍵となるのは、プログラムの立案・担当者と統括者の関係性であろう。関西国際大学を始め、多くの大学では、HIP は、例えば国際交流センター等の一部の部局がプログラムを立ち上げ、そこから教員に担当の依頼がなされるというトップダウンの形態がとられているものと考えられる。当然、プログラムが教員の専門外であることも少なからずあるであろうし、そうした場合、教員の動機付けが低かったり、あるいは負担が大きくなったりすることが予想される。またどうしてもプログラムが普段の授業とは独立したものになりがちで、統合的な学修には結びつきにくい。しかし、IUPUI では、プログラムの立ち上げを教員主導にすることにより、教員が自らの担当する授業（コース）において最も効果のあるであろう HIP を考案することができ、担当教員がもっともその HIP

を理解し、高い動機付けをもって実施を行えるのである。すなわち、プログラムの立案や実施のあり方、方針がボトムアップで **Director** のところに上がってくるのであり、その一方で、各プログラムの形態に縛りを設けることで、各プログラムに共通の枠組みを持たせるという点ではトップダウンの側面も合わせ持つ。

もちろん、既存のプログラムをこうした新規のプログラムとどう整合性を持たせるか、またコースに特化した **HIP** をいかに専門の違った学生にも参加可能なものにするか、といった課題は残っている。その中では、当然、下位学年は、より柔軟性が高く **general** なプログラム、上位学年でとる **HIP** はより専門に特化したプログラム、といったレベル分けも必要となってくる。特に米国では、入学当初は自らの専攻を決めていない学生が多く、前者のプログラムも数多く提供する必要がある。しかし、昨今、**HIP** の重要性が認識され、今後ますますその需要が増すことに鑑みれば、**RISE program** が持つトップダウンとボトムアップのバランスのとれた体系からは学ぶものは多いと考えられる。

【参考文献】

和栗百恵 『『ふりかえり』と学習 -大学教育におけるふりかえり支援のために-』 『国立教育政策研究所紀要』, 第 139 集, 85-100 頁, 2000

Abstract

This paper reports about systemization of High Impact Practices in Indiana University-Purdue University Indianapolis (IUPUI). The university has a platform for its HIPs called “RISE.” RISE frames HIPs in IUPUI and enables faculties and HIP directors to assess students’ learning in the HIPs and efficacy of the program itself with common perspectives and criteria. Also IUPUI faculties can launch new HIPs based on RISE framework. Once the program is admitted as a RISE program, grand for conducting it is allotted to the faculty who launches and leads it, not only which motivates the faculties leading HIPs, but these faculty-invented programs are much better integrated into the courses because the course is taught by the very faculty.